

《 1 5 - 1 》

C S E A S 内プロジェクト報告会について

去る3月12日に上記報告会があり、口羽、福井が報告した。そのときのレジュメといくつかの質問と解答の概要を以下に記します。

[レ ジ ュ メ]

「タイ村落構造の動態的研究」（俗称 ドンデー村調査）

報告者：福井 捷朗， 口羽 益生

1981年度と1983年度の2回にわたった現地調査もほとんど終了しようとしている。調査終了までは、どう考え、したがって、どのようなデータを集めねばならないか、という問題を主として考えてきた。しかし調査終了を間近にひかえたいま、これまでにえられたデータをどう分析し、どう総合するのかを主として考えねばならない。

これから本格化するであろう分析の指針ともなるべきいくつかの仮説を以下に述べ、この機会に批判と示唆をお願いしたい。

【1】 自然と農業

a. 自然立地

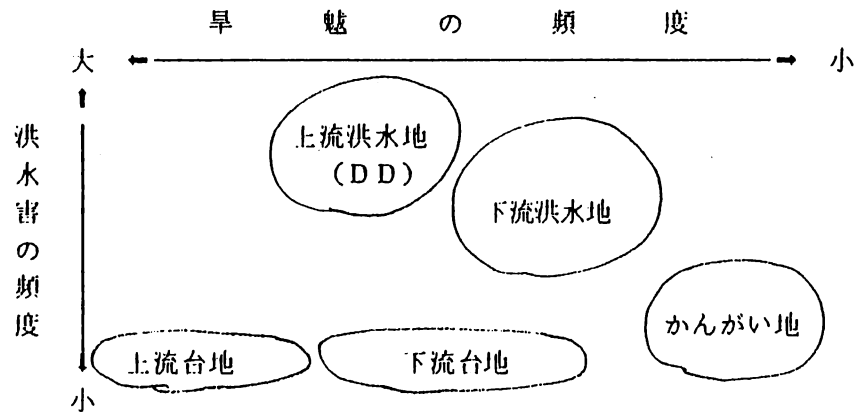
コーラート高原は全体として稲作にとって限界地である。これ以上立地条件が悪ければ稲作は存立しえないであろうという意味で限界地である。コーラート高原の稲作限界地性は、水文学的であり、土壌学的である。すなわち、水条件を決定する降雨と地形は共に稲作にとって劣悪であり、土壌肥沃度もそうである。

アジア稲作圏の成立は、温暖多雨な気候と、山と沖積平野との組合せを特徴とするアルプス造山帯とをもって説明されうるが、コーラート高原ではそのような地形条件を欠き、水分収支も限界に近い。コーラートは基本的には高原状の侵食面である。

このような限界地における稲作は、毎年の収穫を常態としない。したがって稲作にとって意味のある地域区分は、収穫頻度を反映するものでなければならない。収

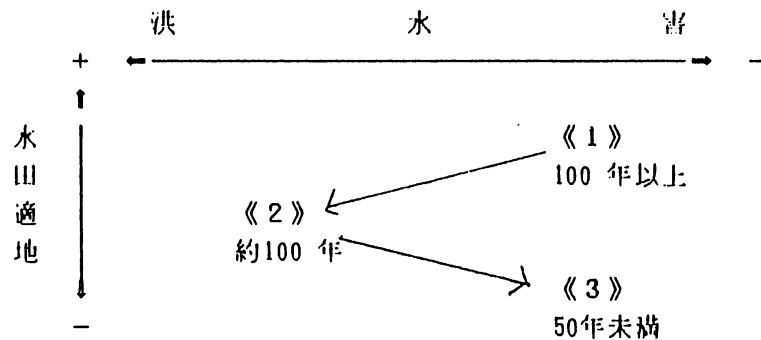
穫頻度は、旱魃と洪水によって決定される。旱魃頻度はほぼ降雨量によっており、それは高原上をほぼ東に流れるメコン支流の下流域ほど小さく、上流域ほど大きい。一方、洪水害は、河川沿の低地（必ずしも氾濫源だけでなく、低位の段丘面を含む）に限られる。

よってコーラート高原の稲作立地区分はおおよそ次の図のようになる。



b. 自然立地と農業

水稻栽培を生業とするラーオ人がコーラート高原に本格的に植民しはじめたのは、18世紀になってからと思われる。植民の空間的パターンは、高原全体で見れば下流域から上流域へであり、局所的には洪水害の頻度と水田適地の広がりによっている。すなわち、一般的には下図で示される。



なお、図中の年数は、DD周辺の20数ヶ村の場合である。Roi Et 付近では、《1》の数字は200年となる。DDは《2》にあたる。

《1》のタイプのムラは水田単作であり、かんがいによって稲作が商業生産化しない限り村内での現金収入源がなく、出稼ぎに頼る程度が大きい。《2》では畑地は少ないが、園芸作物栽培のための乾季の水資源に恵まれる場合が多く、市場に十分近ければ園芸作物による現金収入の途がある。《3》では輸出用畑作物の需要がない時代には恵まれなかったが、ケナフとくにキャサバの導入によって経営規模を大幅に拡大しえた。

【II】土地の開拓、所有、利用

a．開拓前史

下流域からのラーオ人開拓者集団のDDへの到来は、19世紀中頃と思われる。それ以前にスエイ族と呼ばれるクメール系の住民がおり、初期ラーオ開拓者と一部混合し、一部は余所へ移住した。スエイ族も水田耕作者であったと思われる。

b．開拓期（1860s～1920s）

この間に現在の水田域のほぼ全部に所有権が確立された。実際の開田面積は、現在の面積の半分にも満たない（地図参照）。開田は、Nong（自然堤防や低位段丘が侵食されてできた凹地で、コーラート高原上の洪水地の特徴的地形）の底部に限られていたから、現在よりも干害を受けることは少なかったと思われる。

c．水田面積拡大期（1920s～1940s）

Nong 周辺の緩傾斜の開田により、ほぼ現在の水田面積に等しくなった。これによって、Nong の底部から周辺の高みにいたる細長い地片が所有単位となる現在の様相が結果した。おそらく早生品種の導入があったと考えられる。

d．焼畑棉作期（第2次大戦前後）

これまで放牧にしか利用されていなかった林地が、商品作物化した棉を栽培するため焼畑形式で利用された。しかし土地の占有権、所有権は、村民の間でさえも認められていなかった。

e．常畑期（1950s～）

50s, 60sは、ケナフによって、70s以降は、キャサバによって林地はほとんど消滅し、畑地となった。土地所有権が確立された。DDでは畑地の面積は限られており、ムラ経済全体にとってそれほど大きな影響はもたなかった。

f. 野菜栽培期 (1970s~)

チー川の旧流路がDDの近くにあって、乾季にも水をたたえている。その川岸の急斜面を利用した野菜栽培は古くからあったが、飛躍的に重要性を増したのは、たかだか7、8年以前からである。それは道路の整備とコンケン市場の拡大を背景とし、先進野菜栽培地からの技術導入によっている。

【Ⅲ】農業の村域内変異の解析

村域内変異は、土地条件、通作距離、土地所有者・耕作者の社会・経済的条件の3者によっているが、それらの関与の仕方と程度をクロスセクショナルな方法で解析し、生産性規制要因を抽出することと、現行農業のこれら諸条件への適応の実態を明らかにすることを目的とする。

a. 水稲栽培期と品種の早晩

地形(Nong 内の位置)、土壌の保水性など水文条件との関係。

苗代準備との関係。

土地所有・耕作単位との関係。

畜力、労働力(家族、雇傭)との関係。

b. 水稲収量

Nong Sim Ban (NSB) を例にとった多角的調査による。

NSBの半定量的水分収支モデル。

上記aの作期・品種に関する解析結果の適用。

労働投入量(農作業の日データによる)。

その他の投入(ポンプ、苗代施肥など)。

c. 水稲生産の安定性

村域内8,000 筆の収量あるいは収穫の有無(3段階)について、1981年(軽度の早魃)、1983年(空前の大豊作)の実測データその他、1978年(大洪水)、1979年(強度の早魃)、1980年(大洪水)、1982年(強度の早魃)についての聴取情報がある。

このデータを地形、土壌物理性、作期、品種、日降雨量、河川水位などを独立変数として解析。

早魃・洪水被災確率の相違による土地区分。

d. 菜園の作付体系と生産

約20園の1983年6月～1984年2月の期間を通しての観察記録。

耕作者の家計状況（菜園への依存度、労働力、通作距離、産物販売者との関係など）との関係。

e. 畑作の作物種と生産性

菜園と同様の観察記録の解析。

とくに雇傭労働と土地貸借関係。

f. 大型家畜の生産

家畜種と飼育頭数のデータの解析。

役畜の場合、水田耕作との関係。

馬、肉牛の場合、理由と条件の解析（労働力、技術、経営に関する知識、親族間の互助など）。

【Ⅳ】 水稻生産の経時的変化

【Ⅲ】の旱魃洪水被災確率水田区分と、1978～1983年の筆毎収量データ、日降雨量データ、河川水位データとによって、シュミレーション・モデルをつくらうとする。

このモデルに過去の日降雨量、河川水位データをインプットし、さらに水田面積拡大に関する情報、技術変化のトレンドなどを考慮して、過去数10年間の毎年の生産を推計しようとする。

水田所有者図と合わせれば、所有者毎の毎年の生産量が推計できるかも知れない。それができれば家族史の解析に用いることができよう。とくに家族構成員の移出との関係が分ればよいと思っている。

【Ⅴ】 親族共同の体系

1. 共同の規範 「共働・共食」

(1) 家族周期（親の保護・援助 ↔ 尊敬・奉仕）

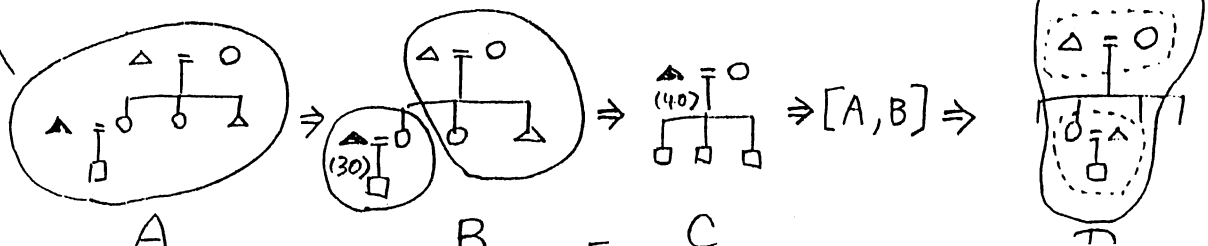
イ. 妻方居住性により、特に婚姻した娘夫婦と親の間に「共働・共食」が強調される。

ロ. 相続 = (末) 娘相続

貧農 ——— 一人の娘相続

中農 ——— 娘姉妹間の分割

富農 ——— 息子・娘＜娘一人相続



(2) 親族の共同関係

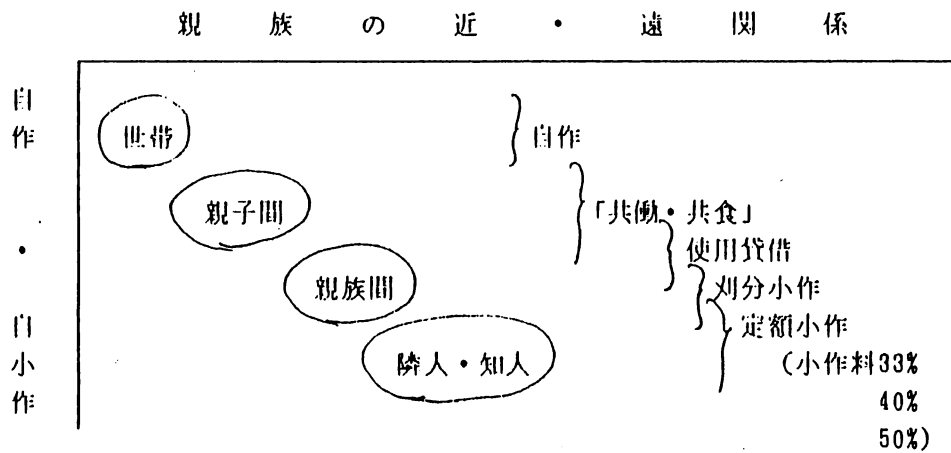
イ．世代間・きょうだい間の共同 (助力・情報 ↔ 尊敬)

ロ．あととり娘(親元)中心の共同 (助力 ↔ 援助・尊敬)

ハ．特定の親族との関係(dyadic) (助力 ↔ 尊敬)

親族の実態 = [イ+ロ+ハ]の累積体

2. 水田をめぐる共同のパターン



(1) 水田の自作地率 37%、共同経営地率38%、
小作地率25% (宮崎)

(2) 「共働・共食」と家族周期

イ 共働・共食・同居

ロ 共働・共食・別居

ハ 共働・別食・別居(米の分割・分与)

ニ 別働・別食・別居

i 使用貸借

ii 刈分小作

iii 相続完了

iv 定額小作

v 米の分与・協働

(3) 水田 = 共同の基本的財

3 宗教的共同とその論理

(1) タンブン —————→ 自己の転生と修養・三宝の護持
—————→ 回向—————→ 親(母親)、他界した近親の転生

(2) 親の恩恵 ←————→ 子の得度・供養(子・親族)

【VI】 ムラのリーダーシップ

1 ムラの宗教とリーダー

	民俗宗教 (syncretism)	仏教 (universalism)
通過儀礼	——	——
強化儀礼	——	——
リーダー	モータム(pl.)	僧
資格	民間治療の知識 カリスマ源としての 知識 禁欲	清浄域 戒律
	exemplary	exemplary ↓ 俗化 ↓ wat paa

2 ムラとリーダー

(1) リーダーのタイプ

親族	ムラ (wat 中心)	行政村
↓		
長老	モータム exemplary (DD + DN)	村長 instrumental (DD, DN)

(2) リーダーの分化

有力モータム = 村長 (精神的リーダー、ムラの代表)
対
有力モータムと村長 (行政上のリーダー) の分化

【Ⅶ】人口増への対応

a. 人口調査

DD 現住妊娠経験者に対する出産、流産、墮胎、幼児死亡、避妊に関する聴取調査データ (1983 年)。

これによって、出生率、死亡率 (幼児死亡率からの推定) の変化を知る。

系図をもとにした、かつての DD 在住者の在村期間の調査データ。現住者と系図上でつながらない過去の在住者は、過去の水田所有者調査と過去の屋敷地、住宅占有者調査データによってチェック。

これによって、60～70年間の人口が許容されうる精度で把握されたと考えている。

b. 土地 (とくに水田) と人口

系譜調査と平行した水田所有・耕作者の調査 (DD 在村者が、在村中にどこの田圃で働き、どこ田圃の米に依存していたか)。

家計を共にする (とくに水田耕作と米消費を共にする) 集団のひとつひとつについて、水田面積と人口とを対比させる。

家族史（上記集団の全体あるいは構成員の一部の移動（出生、死亡、移出）、米生産以外の経済活動、土地の賃借など）と水田／人口比との関係。

上記【Ⅳ】のシュミレーションが成功すれば、水田面積／人口比の代りに米生産高／人口を用いることができる。

c. 結果の見通し

移出の主な形態には、婚出（主に男性）、都市への移住、開拓地への移住の3種がある。3番目は、「良い田を求めて」（ハーナーデー、以後、HNDと略す）と呼ばれる。これに注目すべきであると考えている。

HNDについて、次のような印象をもっている。

けっして落伍者ではない。下層農民ではない。

子供とくに娘の多い父親の責任ある尊敬されるべき行為であると考えられている。

きわめて一般的である。どの村民をとってもその近親者のなかに数人のHND実行者がいる。

ムラに対する村民の執着あるいは郷愁は、土地に対するよりはムラの人間関係に対するものと思われる。

DDから多数の人がHNDに行った開拓地の訪問で受けた印象は、開拓地の生活はラーオ人の伝統的価値観の具現ではなかろうか、と言うものであった。

結論として、HNDはラーオ人の常態ではなかろうか？

必ずしも人口圧によらないHNDが、今世紀の人口増加によって加速されたのか？

ムラ生活のその他の面（親族関係、相続、宗教・儀礼など）も、ラーオ人がHNDを常態とする民族であると考ええると整合性があるように思える。

もしHNDを常態だとすると、東北タイの地域開発を考える際、東北タイ人の将来の居住地を東北に限定して考えることは具合が悪いことになる。

HNDをめぐる問題がDD調査の最終的結論のひとつとなるかも知れないと思っている。

【Ⅷ】 経済

経済については、次の2種類のデータがある。

セクター分析のためのデータと経営主体分析のためのデータとである。

問題と考えられていることは、2点ある。

ひとつは、経営主体をどうとるかである。家族の共同の項でみたように、とくに米の生産と消費を共にする複数世帯を、経済分析においてどう扱うかが問題。

もうひとつの問題は、より一般的なもの、現金収入を結果する経済活動と自家消費食糧を獲得することを目的とする経済活動が同一生計単位内に共存する場合の分析方法についてである。

経済分析全体を通じての問題のひとつは、稲作の重要性が経済的に説明されるかどうかである。生産の年変動が極度に大きく、ストックとしての水田の保持などを的確に考慮した経済分析が必要であると思われる。

(以上)

質 疑 応 答 の 概 要

石井： 東北タイは限界地ではあるが、そのことはこの地域が重要でないことを意味するものではない。面積、人口において、タイ国全体のほぼ3分の1を占める。

高谷： HNDという形での移動は、いつ頃から重要になったか。1826年のラーオ戦争以前は、シャムの警察権は及んでおらず、人口の移動は、強制入植や屯田兵など政治権力のイニシアチヴによったと考えられる。バンコクの権力による治安の改善が見られて以降、HNDが顕著になったのではなかろうか。

友杉： 都市への出稼ぎとHNDとは関係があるのか？

土屋： HNDの経済的背景をもっと明確にすべきであろう。とくに立地の限界地性とHNDとの関係が必ずしも明らかではない。